

# 千葉市古山遺跡（第4次）

—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2019

有限会社舟寶リース 長谷川崇 板倉秀夫 吉田政次  
千葉市教育委員会  
株式会社地域文化財研究所

# 千葉市古山遺跡（第4次）

—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2019

有限会社舟寶リース 長谷川崇 板倉秀夫 吉田政次  
千葉市教育委員会  
株式会社地域文化財研究所

## 例 言

- 1 本書は、千葉市若葉区加曾利町 1784-2 ほかに所在する古山遺跡第4次地点の、集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理調査は、千葉市教育委員会が主体となって行い、有限会社舟賀リース、長谷川崇、板倉秀夫、吉田政次から委託された株式会社地域文化財研究所の調査支援を受けた。
- 3 調査概要是以下のとおりである。

調査面積 575 m<sup>2</sup>

調査期間 本調査 2018(平成30)年9月3日～10月23日

整理調査 2018(平成30)年11月6日～2019(平成31)年2月22日

調査主体 千葉市教育委員会

調査担当者 白根義久(千葉市埋蔵文化財調査センター)

調査支援 高野浩之 斎藤洋(株式会社地域文化財研究所)

調査参加者 青山正博 今野秀樹 表 豊 田中成光 古里兼吉 橋 勝雄 深山恒男  
川村理華 木村春代 小林真千子 野村浩史 藤井陽子 増田香理

- 4 本書は、白根、高野、斎藤が分担して執筆し、白根の指導のもと高野が編集した。文責は各節の文末に記載してある。
- 5 基本層序については近藤敏氏に、縄文土器については斎藤弘道氏にそれぞれご教示いただいた。
- 6 出土遺物及び図面・写真など記録類は、千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
- 7 刊行に至るまで、下記の方々・諸機関よりご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表する。

五十嵐禮子 有限会社舟賀リース 長谷川崇 板倉秀夫 吉田政次 近藤 敏

斎藤弘道 武 孝夫 積水ハウス株式会社千葉シャーメゾン支店

(敬称略・順不同)

## 凡 例

- 1 測量基準は世界測地系を用い、挿図中の方位は座標北を示す。
- 2 今回の調査で使用した遺跡・遺構の略号は以下のとおりである。  
古山遺跡第4次地点：フルヤマ4次 垂穴住居跡：S I 土坑：S K 遺構内柱穴：P
- 3 遺構の土層や遺物の色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいた。
- 4 挿図中の縮尺は遺構が1/30・1/60、遺物が1/3・1/4である。
- 5 遺物観察表の中で、( )は復元値を、〈 〉は残存値を表し、計測値は「cm」単位である。
- 6 出土遺物一覧表の集計は、1/2以上残存するものを個体とし、それ以外は破片とした。また、同一個体であっても接合できないものは1点として数えた。
- 7 掲載遺物は遺構ごとに番号を付し、本文・挿図・写真図版共に一致している。
- 8 本文中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

■ ■ 焼土範囲カマド被熱

■ ■ 土器・赤彩

## 本文目次

### 例言・凡例・目次

第1章 古山遺跡第4次調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	2
第2章 古山遺跡の概要	
1 遺跡の立地と周辺の遺跡	3
2 過去の調査歴	3
3 基本層序	6
第3章 検出した遺構と遺物	
1 縄文時代	7
2 古墳時代	9
第4章 まとめ	18
写真図版・抄録	

## 挿図目次

第1図 古山遺跡の位置と周辺の遺跡図	2	第10図 第2号竪穴住居跡(1)	12
第2図 古山遺跡の位置と地形図	4	第11図 第2号竪穴住居跡(2)・ 同出土遺物(1)	13
第3図 本次地点と過去の調査区位置図	4	第12図 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	14
第4図 遺構全体図	5	第13図 第3号竪穴住居跡	16
第5図 基本層序	6	第14図 第3号竪穴住居跡出土遺物	17
第6図 第1号土坑	7	第15図 第4号竪穴住居跡・同出土遺物	17
第7図 遺構外出土遺物	8	第16図 第2号竪穴住居跡・ 床直上出土遺物	19
第8図 第1号竪穴住居跡(1)	10		
第9図 第1号竪穴住居跡(2)・同出土遺物	11		

## 表目次

第1表 出土遺物観察表	20	第2表 出土遺物集計表	22
-------------	----	-------------	----

## 写真図版目次

図版1 調査区全景／調査前現況／調査区全景／調査区北西側全景／調査区北東側全景	
図版2 基本層序／第1号土坑全景／第1号竪穴住居跡全景／同 土層断面／同 カマド近景／ 同 カマド土層断面／同 カマド右袖塗出土遺物／同 貯蔵穴近景	
図版3 第2号竪穴住居跡全景／同 土層断面／同 貯蔵穴1近景／同 遺物出土状況／ 同 北側遺物出土状況／同 北西壁出土遺物／同 東隅出土遺物／同 南隅出土遺物	
図版4 第2号竪穴住居跡貯蔵穴1出土遺物／同 出土遺物／同 貯蔵穴2出土遺物／第3号竪穴住居跡全景／ 同 炭化物検出状況／同 出土遺物／同 貯蔵穴近景／第4号竪穴住居跡全景／ 同 遺物出土状況	
図版5・6 出土遺物	

## 第1章 古山遺跡第4次調査の概要

### 1 調査に至る経緯

平成29年8月18日付で、株式会社フナトミ、板倉秀夫、長谷川崇、吉田政次（以下「事業者」という。）から、集合住宅建設を計画している千葉市若葉区加曾利町1784番2ほか（面積3380.91m<sup>2</sup>）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長宛てに提出され、千葉市埋蔵文化財調査センターが試掘を実施した結果、堅穴住居跡が検出された。

試掘結果を事業者に伝え、協議した結果、発掘調査が避けられないことが判明したため、平成29年8月30日付け29千教理セ第171号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

その後、同年10月20日付で、事業者より「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年11月13日付け29千教理セ第233号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、同年11月20日～12月1日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、縄文時代土坑1基、古墳時代住居跡3軒が検出され、同年12月8日付け29千教理セ第277号にて、総面積のうち、575m<sup>2</sup>を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨、事業者宛に通知した。

再度協議の結果、対象範囲全城を記録保存のための本調査を実施することになり、平成30年8月20日付で、五十嵐禮子、有限会社舟寶リース、長谷川崇、板倉秀夫、吉田政次から、千葉市教育委員会教育長宛てに「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年8月27日付け30千教理セ第185号により千葉県教育委員会教育長宛て埋蔵文化財発掘の報告を行い、依頼者の委託を受けた株式会社地城文化財研究所の支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、同年9月3日から10月23日まで発掘調査を実施した。  
(白根)

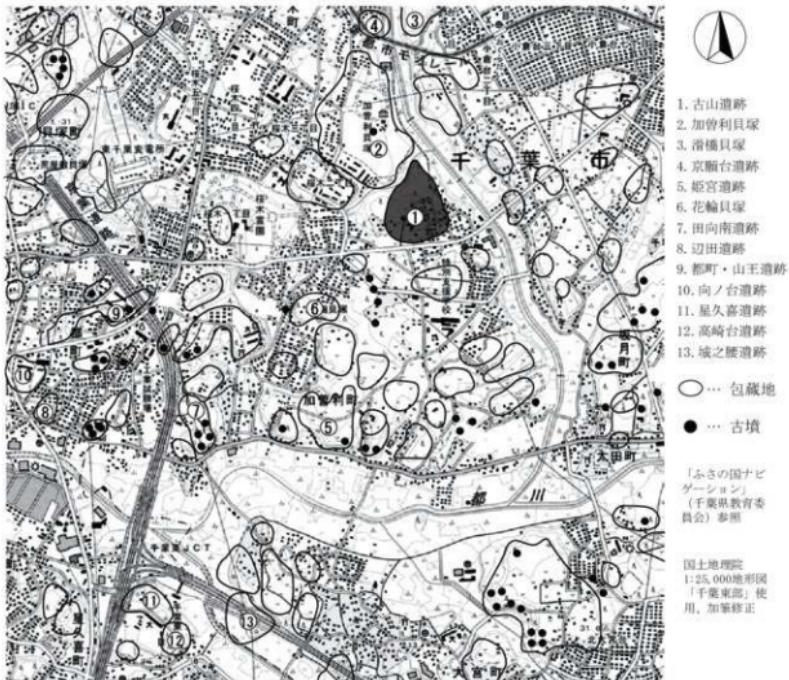
### 2 調査の方法

遺構調査では、掘り下げに際して堅穴住居跡には土層観察用のベルトを十字に設定する4分割法を、土坑・ピットには2分割法を用いた。なお、出土遺物の取り上げは原位置での記録を基本として調査に臨んでいるが、堅穴住居跡出土の細かい遺物は、前述の4分割法を利用して北東角から時計回りで1区～4区のブロックに分け、さらには深い遺構では上層・中層・下層の層位ごとに一括して取り上げている。基準点は世界測地系より求め、X軸42050、Y軸30300の交点を基点として10m×10mの方眼グリッドを設定した。グリッド名はX軸には北から南へA～Dのアルファベットを、Y軸では1～4の算用数字を付し、各遺構の位置や出土遺物を取り上げる基準とした（第4図）。遺構の実測は1/20縮尺を原則として平・断面図を作成しているが、カマドや炉跡などは1/10の縮尺を用いた。写真的記録はフィルムのモノクロ35mmとカラーリバーサル35mmを主要機として使用し、デジタルカメラも併用した。

### 3 調査の経過

平成30年9月3日、発掘調査を開始した。重機による表土除去から着手し、6日、調査補助員を投入した。遺構確認作業から入り、10日には遺構確認作業を継続しつつ、SI01の掘削を開始した。11日、遺構確認作業を完了し、確認された遺構は竪穴住居跡4軒、土坑1基となった。18日、SI01にはカマドが付設する事が判明し調査を行った。20日、SI01の掘削とともにSI02の掘削にも着手した。24日、SI02は当初の確認形状よりも広がる可能性が高くなり、サブトレンチを設定して壁面検出に努めた。26日、午前中、近隣住民を対象とした現地説明会を実施した。午後からはSI01-SI02の掘削を継続し、28日にはこれらと併行して、新たにSI03の掘削に着手した。10月に入り、1日は基本層序観察のためのテストピットを掘削した。5日、SI01～SI03の調査と併行してテストピットの掘削を行った。9日にはSI04の掘削に着手し、12日にはSI01～SI04の掘削を継続しながら、新たにSK01の掘削及び調査を実施した。16日、各遺構の全体写真撮影に向けた調査区内の清掃を開始し、17日に全体写真の撮影を行った。その後各竪穴住居跡の床面除去と掘り方調査を行い、19日、発掘調査の全工程を終了、23日、現状復旧を完了した。

(斎藤)



第1図 古山遺跡の位置と周辺の遺跡図

## 第2章 古山遺跡の概要

### 1 遺跡の立地と周辺の遺跡

古山遺跡の所在する千葉市若葉区は下総台地の南西部に位置する。区域は比較的起伏の少ない安定した台地上に立地し、地層は第四期洪積世に形成された下総層群の上を関東ローム層が覆う。海拔高度は本遺跡のある加曾利町付近で26m前後を測る。区内の台地面は、鹿島川や都川及びその支流の浸食により削られた大小の支谷があり組み、複雑な地形が形成されている。また、各河川の下流域や大きな谷筋には、「氾濫低地」と呼ばれる比較的規模の大きな平坦地も分布する。

古山遺跡は千葉市のほぼ中央を流れる都川の一支部、坂月川の西岸に面した標高約23～24mの台地上に所在し、縄文時代、古墳時代、中近世を包括する複合遺跡である。今回発掘調査を実施した第4次地点の現況は、調査区の西側がひな壇状に一段高くなっているが、これは後世の造成工事によるものとみられ、本来の自然地形は調査区の西側台地平坦部から東側の坂月川方面へ向かって緩やかに下る傾斜地であったことがうかがえる。

本遺跡周辺では、旧石器時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡としては城之腰遺跡が挙げられ、ナイフ形石器や尖頭器類が出土している。縄文時代の遺跡は周辺に多数所在しており、北西側の谷津（古山支谷）を挟んだ対岸台地上、直線距離にして約200mと至近の位置関係には学史上でも著名な加曾利貝塚が存在し、2017（平成29）年に国の特別史跡に指定されている。向ノ台遺跡では早期の炉穴群が、城之腰遺跡では中期前葉～中葉の集落、そして、後期の貝塚では花輪貝塚・滑橋貝塚、高崎台遺跡などの所在が明らかとなっている。弥生時代の遺跡も本遺跡周辺には多く認められ、この内矢作貝塚（第1回枠外）では中期中葉の資料が確認されている。城之腰遺跡、星久喜遺跡、辺田遺跡では中期後葉に比定される比較的大規模な集落跡や墓域が所在する。本遺跡と近い田向南遺跡では後期に営まれた集落跡が検出されている。弥生時代終末～古墳時代にかけては、姫島遺跡から出土した弥生終末期の資料がある。古墳時代になって、小規模ながら周辺には該期の集落跡や墓域も点在している。古代の遺跡では、南西に位置する千葉寺町付近（第1回枠外）には鷺谷津遺跡や觀音塚遺跡、大北遺跡など密集する傾向が顕著に見られるが、本遺跡の隣接地に於いても単独で京順台遺跡の所在が確認されている。中世では代表的なものに都町・山王遺跡や向ノ台遺跡などがあり、これらの遺跡からは堀跡や台地整形区画、地下式坑などが検出されている。

### 2 過去の調査歴

古山遺跡の調査は今回の調査で4回目となる。第1次調査は昭和63年度に行われ、縄文時代早期の集石1基、土坑22基、前期後葉の竪穴住居跡3軒、中期前葉の竪穴住居跡1軒が検出されて、遺構外遺物として早期前葉～晚期前葉に比定される資料も出土している。古墳時代では前期末葉～中期の竪穴住居跡24軒、土坑2基が検出され、当該期の比較的大きな規模で集落が展開する様相が明らかになった。古墳時代前期末葉の22号住居跡からは、當時としては県内外でも住居跡からの出土事例が稀有な「短甲・冑等」の部材と考えられる鉄製品（三角板・長方板でいずれも皮綴式）が出土しており、希少かつ竪穴住居跡の出土例ということで注目を集める資料となった。また、各時代を通して

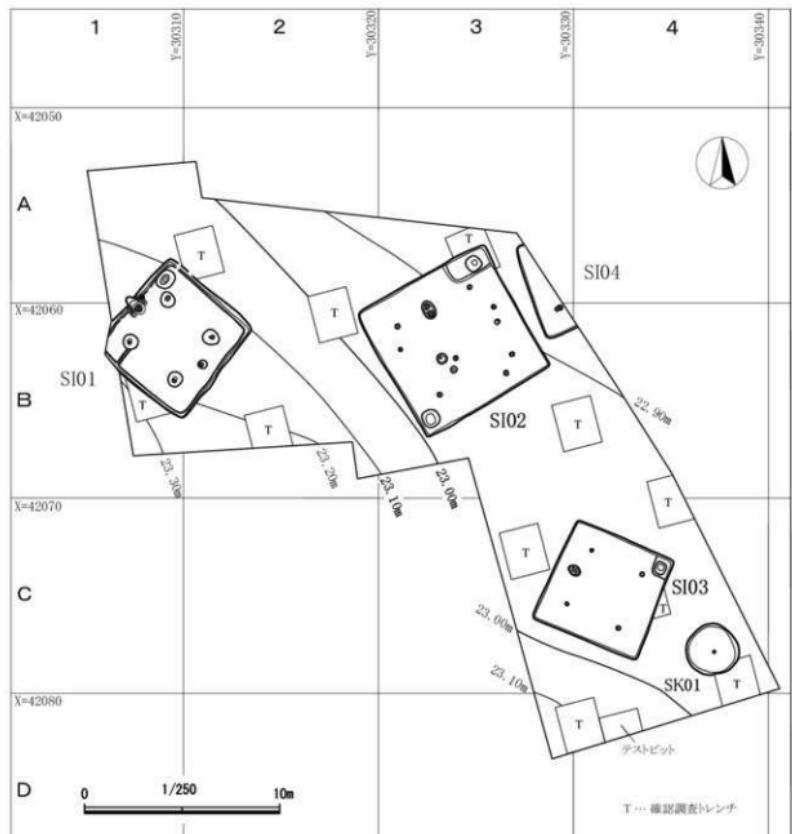


第2図 古山遺跡の位置と地形図 (S=1/5,000)



第3図 本次地点と過去の調査区位置図 (S=1/2,500)

た集落の営みは台地の縁辺部に集中する傾向が捉えられている。平成 22 年度に行われた第 2 次調査では、縄文時代の遺構は検出されなかったものの、第 1 次調査同様に早期前葉～晚期前葉の遺物が認められる。古墳時代の遺構は縁辺部からやや離れた地点に調査区が設定され、遺構は古墳時代前期末葉に比定される竪穴住居跡 1 軒の検出で、縄文時代は前期から後期にかけての遺物が出土するのみであった。平成 29 年度に行われた第 3 次調査では、縄文時代の土坑 2 基、古墳時代の竪穴住居跡 3 軒、性格不明遺構 1 基が検出され、竪穴住居跡は古墳時代前期末葉から中期終末期にかけてのものである。中・近世では遺構には伴わない陶磁器の破片が出土したのみであった。

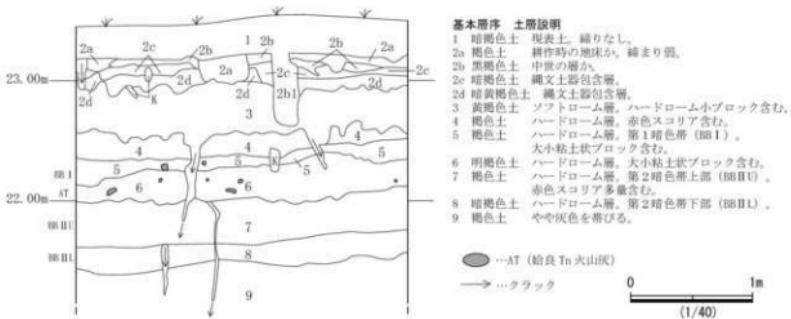


第 4 図 遺構全体図

### 3 基本層序

本次地点の基本層序は D 4 グリッド内に幅 3.0m × 奥行き 2.0m × 深さ 20m のテストピットを 1ヶ所設定し観察を行った。第 1 層は箒竹等の根の侵入が著しく、縫まりの無い暗褐色の現表土である。第 2a 層も縫りの弱い褐色土で、該地が畑として機能していた耕作時の地床であろうか。第 2b 層は黒褐色土で、一部にブロック状や版状に硬化したものが含まれた中世にも見られる層である。擾乱等により不連続となる暗褐色土の第 2c 層と暗黃褐色土の第 2d 層は、縄文土器を包含するソフトローム層への漸移層である。第 3 層は黄褐色のソフトローム層で、野川Ⅲ層（調布市野川遺跡由来。立川ローム層の別称）に相当し、若干のハードロームの小ブロックが浮くこの層の上面が遺構確認面になる。第 4 層との境界付近にはクラックがあり込んでいる。第 4 層はやや赤身のある褐色のハードローム層で野川Ⅳ層に相当し、赤色スコリアが散在することからやや赤みを帯びた印象が持たれ堅く縫まる。第 5 層は第 4 層と同じくやや黒みのある褐色のハードローム層で野川Ⅴ層に相当する第 1 暗色带（BB I）である。黒色の細粒スコリアが散在するためやや黒みを帯びた印象の色調となり、層中には黄白色の粘土状ブロック（始良 Tn 火山灰 = AT カ）の大小も散在する。第 6 層は明褐色のハードローム層で、野川Ⅵ層に相当する。全体的に火山性ガラス質粒子を含有するやや明るめな色調となり、第 5 層と同様に黄白色の粘土状ブロックの大小も散在する。第 7 層は褐色のハードローム層で、野川Ⅶ層と対比される。第 2 暗色带の上部（BB II U）に相当すると思われ、赤褐色のスコリアを多量に含有する。なお、第 7 層と第 8 層の境界は橙色等のスコリアの凝固する範囲で、野川Ⅷ層に相当する可能性がある。その下部の第 8 層（野川Ⅸ層と対比可能カ）は暗褐色のハードローム層で、第 2 暗色带の下部（BB II L）に相当すると考えられる。第 9 層はやや灰色を帯びた褐色土で、スコリアの混入が少ないことから野川Ⅹ層に相当すると思われ、立川ローム層対比では最下部となる。先述した第 3 層～第 4 層付近と同様に、第 7 層～第 9 層にかけて縫方向に大きくクラックが入る。

（斎藤）



第 5 図 基本層序

### 第3章 検出した遺構と遺物

#### 1 繩文時代

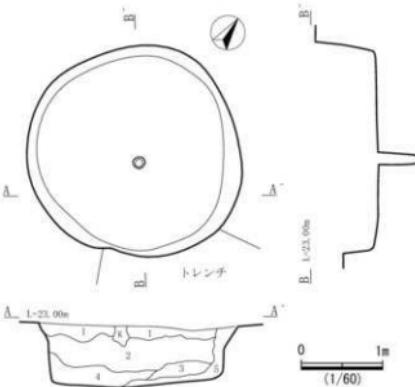
##### (1) 概要

縄文時代の遺構は、第1号土坑の1基のみを検出した。また、調査区内からは縄文土器の細片が遺構確認時や古墳時代の堅穴住跡を掘り下げる際に覆土中から出土した。これらは遺構外出土遺物として取り扱っている。出土遺物については第2表で種類・時期・器種別に分類し、総数を掲載した。

##### (2) 土坑

###### 第1号土坑（第6図、図版2）

【検出状況】C 4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は認められない。【形状・規模】平面形状はほぼ円形で、断面形状は筒状である。規模は径2.70m前後を測り、確認面から底面までの深さは0.75mで、底面はほぼ平坦である。【覆土】黒褐色土と暗褐色土が主体となる5層で、自然堆積の様相を呈する。各層ともに硬く縮まる。【ピット】遺構底部のはば中央から、直径14cm、深さ49cmのピットを1基検出した。【出土遺物】なし。【時期】本遺構から遺物は出土しなかつたが、覆土の状態と遺構形態から縄文時代と判断した。（斎藤）



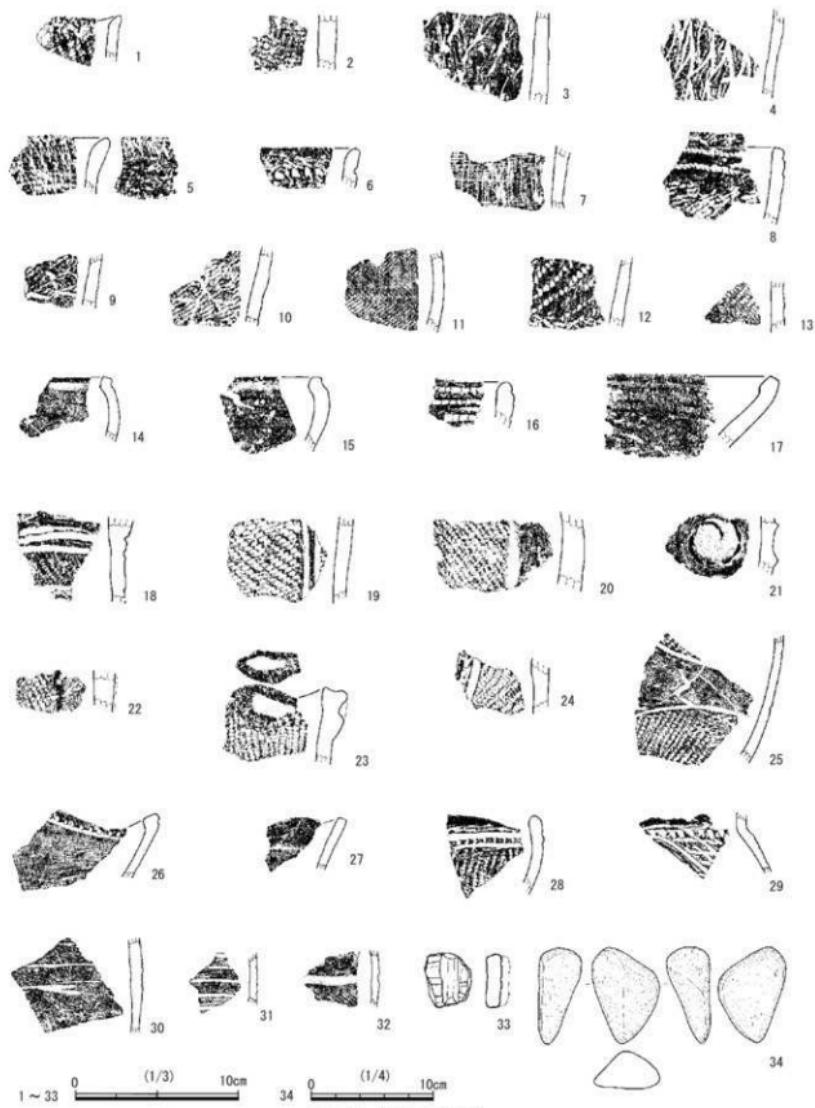
第1号土坑 土層説明

- |         |           |                              |
|---------|-----------|------------------------------|
| 1 極暗褐色土 | 7.5YR 2/3 | ロームブロック（小）多量含む。縮まる。          |
| 2 黒褐色土  | 7.5YR 2/2 | ロームブロック（小）多量含む。強く縮まる。        |
| 3 暗褐色土  | 7.5YR 3/4 | ローム粒多量含む。強く縮まる。              |
| 4 暗褐色土  | 7.5YR 3/4 | ローム粒・ロームブロック（小～中）多量含む。強く縮まる。 |
| 5 暗褐色土  | 7.5YR 3/4 | ローム粒全体的に含む。やや粘る。             |

第6図 第1号土坑

##### (3) 遺構外出土遺物（第7図、図版3）

本次調査で出土した縄文時代の遺物は土器103点、石器の磨石1点である。遺構に伴うものは無く、表面採取や古墳時代の遺構覆土中に混入した遺物で占められている。時期は前期黑浜式を最古に晚期まで幅広く認められるが、概ね前期後半の興津式から前期終末にかけての栗島台式と、後期後半の加曾利B III式の破片が目立って出土している（第7図）。前期では、3～7が興津式で貝殻文が主体である。3の波状貝殻文は4よりも厚手で波状文の間隔が広く古相とみられる。8～12が栗島台式で縄文原体圧痕文や結節回転文が多く用いられている。10には補修孔が認められる。中期では13が胎土に金雲母を含む五領ヶ台式、14～16は阿玉台I a～I b式の無文口縁部片と考えられ、16は有節沈線が多用されていることから阿玉台I b式とみられる。18～22は加曾利E式でIII～IV式の後半段階が主体である。後期以降では25～29が加曾利B III式で、口縁部片には波状を呈するものが多い。29は頸部から下が斜条線を施した胴部片であるが、地文に縄文が施されている。対して30・31は地文が無文となり、後続する曾谷式に近いと考えられる。32の磨消縄文は幅が広く浅い沈線で区画されており、晩期安行3d式の前浦式併行であろう。（高野）



第7図 造構出土遺物

## 2 古墳時代

### (1) 概要

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡4軒を検出した。その内、第2・3号竪穴住居跡は炉が構築され、出土遺物から中期と判断される。対して第1号竪穴住居跡は北西壁にカマドが付設され、出土遺物から後期と考えられる。第4号竪穴住居跡は北東側の大部分が調査区外となるため時期を把握することができなかった。中期の帰属とした第2号竪穴住居跡からは、覆土中からではあるが鍛冶関連遺物として鏡形滓が出土している。出土遺物については第2表で種類・時期・器種別分類し、総数を掲載した。

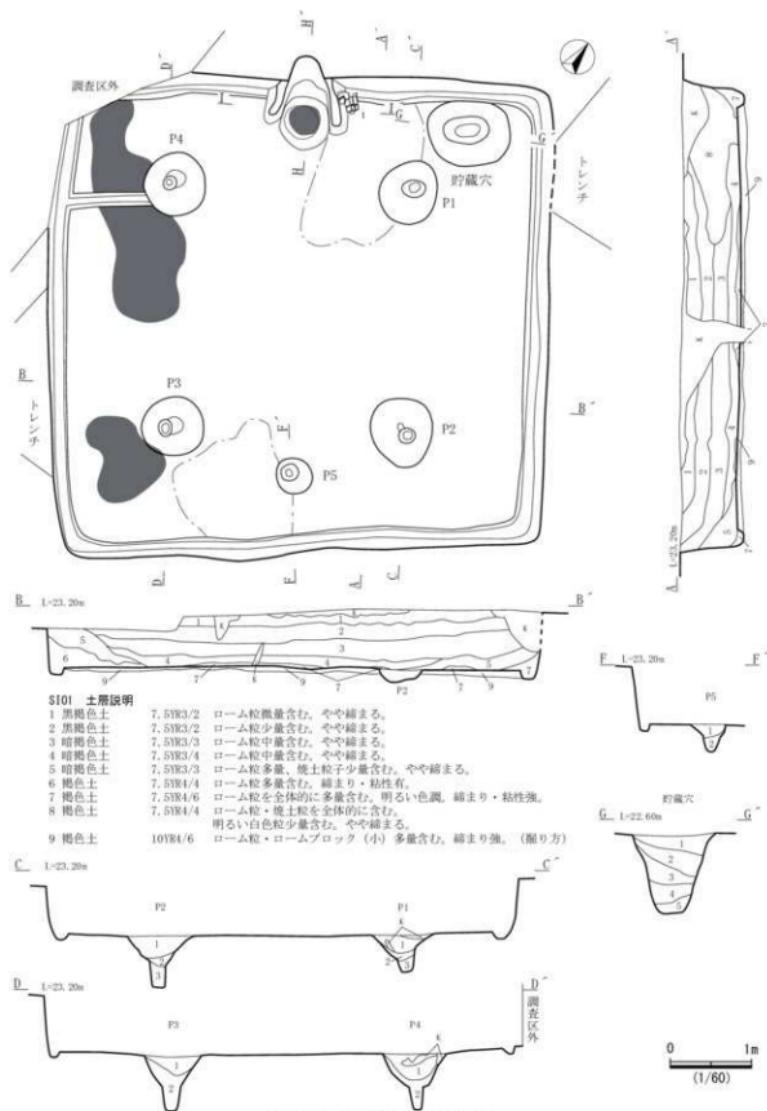
### (2) 竪穴住居跡

#### 第1号竪穴住居跡（第8・9図、図版2）

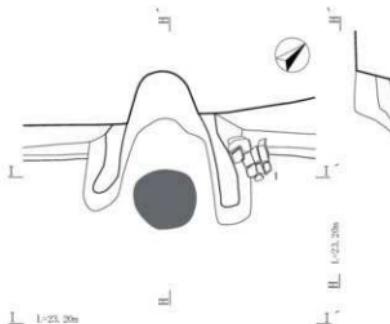
【検出状況】A 1・2、B 1・2グリッドに跨がって位置し、遺構西側の一部は調査区外となる。他遺構との重複関係は認められない。【形状・規模】平面形は方形を呈し、カマドが通る方向を主軸とした場合、N-48°-Wを示す。規模は主軸方向が5.94m、主軸に直交する方向が6.18m、遺構確認面から床面までの深さは0.72mを測る。【覆土】黒褐色土、暗褐色土を主体とした8層に分層され、埋没状況は自然堆積の様相を呈する。2～3層の位置には部分的に塊状の焼土が含まれる。【床面・壁】床面は貼り床で平坦に整えられ、壁際の一部で硬化する。掘り方は浅く掘り込まれる程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。【柱穴】5基を検出し、いずれも円形で漏斗状の掘り込みである。規模はP1が径77cm、深さ45cm、P2が径85cm、深さ65cm、P3が径76cm、深さ69cm、P4が径75cm、深さ67cm、P5が径45cm、深さ47cmである。配置状況からP1～P4が主柱穴となり、P4には西側壁から伸びた間仕切り状の溝が接続する。P5は出入り口施設に関連する柱穴と判断した。【貯蔵穴】北側隅に付設する。平面形は梢円形で、断面形は逆台形状に掘り込まれる。規模は長軸96cm、短軸80cm、深さ108cmを測る。【カマド】北西壁の中央部に付設する。規模は煙道から火床までが1.15mで煙道部は屋外へ30cm掘り込まれ、袖部分の最大幅は1.04mを測る。火床面の焼成痕は全体的に弱く、火床面下には10cm程度の浅く皿状に窪む掘り方を持つ。【遺物】土師器の出土量は231点であるが、接合不可能な細片が多い。土師器甕の胴部片が主体で、図示できたのはカマド右袖脇から出土した1の土師器甕のみである。【時期】遺構の形態や出土遺物から、古墳時代後期と考えられる。

#### 第2号竪穴住居跡（第10～12図、図版3・4）

【検出状況】A 2・3、B 2・3グリッドに跨がって位置する。他遺構との重複関係は認められない。【形状・規模】平面形はほぼ正方形を呈し、炉1を通る方向を主軸とした場合、N-31°-Wを示す。規模は主軸方向が7.34m、主軸に直交する方向が7.40m、遺構確認面から床面までの深さは0.33m前後を測る。【覆土】黒褐色土を主体とした8層に分層され人為的に埋め戻された様相を呈し、全体的に締まる。床面直上では焼土と炭化材が散乱することから、焼失した住居跡と考えられる。焼土はさほど多くはないものの、炭化材は炉周辺から北東側を中心に多く見られた。【床面・壁】床面は貼り床を施して平坦に整えられ、住居内全体が硬化している。掘り方は壁際が環状に深く掘り込まれていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。【柱穴】4基を検出し、いずれも円筒状の掘り込みである。規模はP1



第8図 第1号整穴住居跡 (1)



**カマド 土層説明**

- 1 黒褐色土 7.SYR2/2 填土粒少量含む。
- 2 暗褐色土 7.SYR3/4 填土粒多量含む。
- 3 暗褐色土 16SYR3/4 山砂粒・填土粒少量含む。  
粘性や有。
- 4 赤褐色土 2.SYR4/6 填土粒多量含む。  
粘性や有。
- 5 にじ赤褐色土 SYR1/4 山砂粒・填土粒を  
全体的に含む。やや締まる。
- 6 暗赤褐色土 SYR3/6 山砂粒少量、填土粒多量  
含む。粘性や有。
- 7 暗褐色土 7.SYR4/4 カマド構造の山砂。
- 8 暗赤褐色土 SYR3/6 填土ブロック多量含む。  
粘性強。
- 9 暗赤褐色土 SYR3/2 填土ブロック少量、填土粒  
多量含む。締まり強。粘性有。
- 10 暗褐色土 7.SYR4/6 ローム粒・ロームブロック(小)  
多量含む。締まり強。

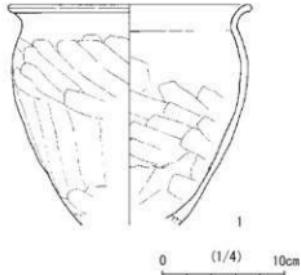


**貯蔵穴 土層説明**

- 1 棕褐色土 7.SYR2/3 ロームブロック(小)少量含む。締まりなし。
- 2 暗褐色土 2.SYR3/3 ロームブロック(小)中量含む。締まりなし。
- 3 暗褐色土 2.SYR3/2 ロームブロック(小)少量含む。締まりなし。
- 4 晴赤褐色土 SYR3/2 ローム粒・填土粒少量含む。締まりなし。
- 5 暗褐色土 7.SYR3/4 全体的にローム粒子混入。締まりなし。

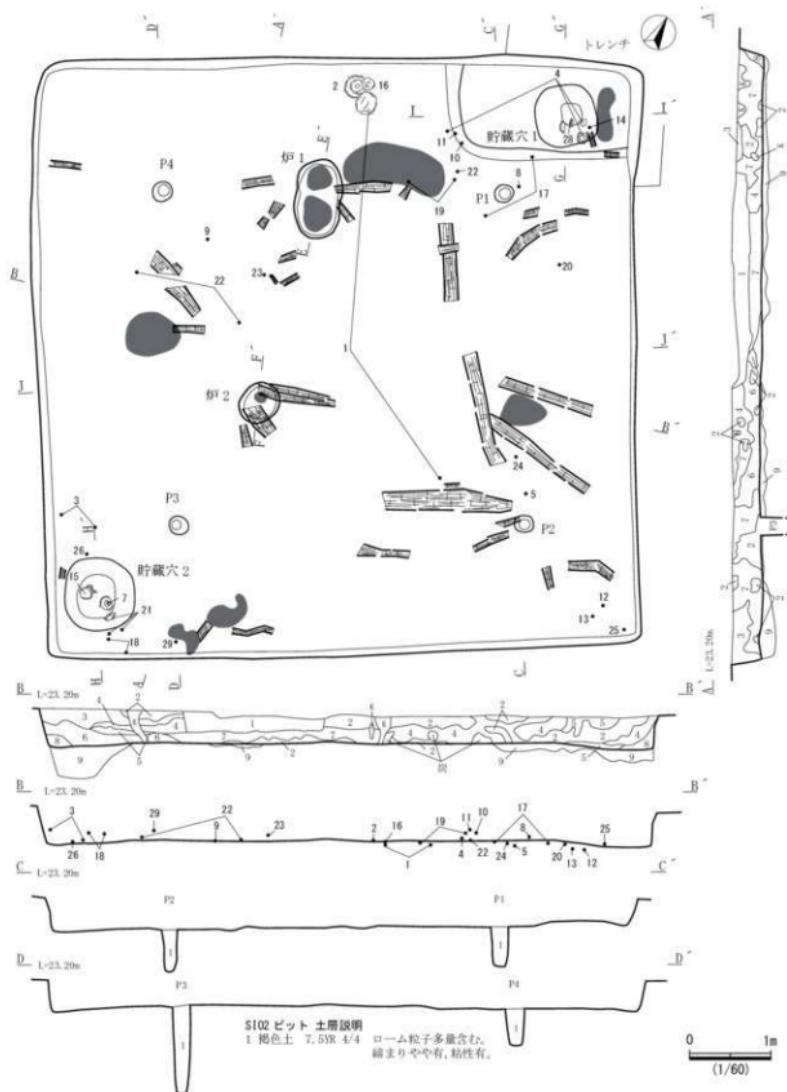
**ピット 土層説明**

- 1 棕褐色土 7.SYR2/3 全体的にローム粒子混入。締まり有。粘性や有。
- 2 暗褐色土 7.SYR3/4 ロームブロック(小~中)少量含む。やや締まる。
- 3 暗褐色土 7.SYR4/4 ローム粒多量含む。締まる。

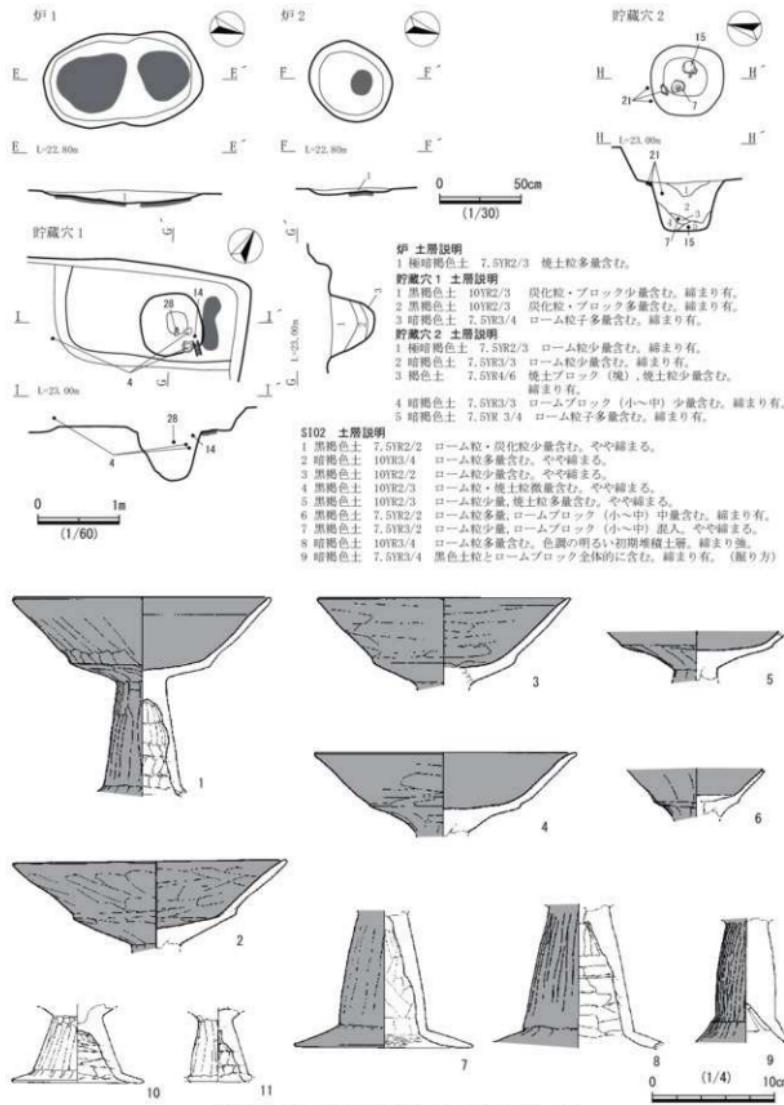


第9図 第1号竪穴住居跡(2)・同出土遺物

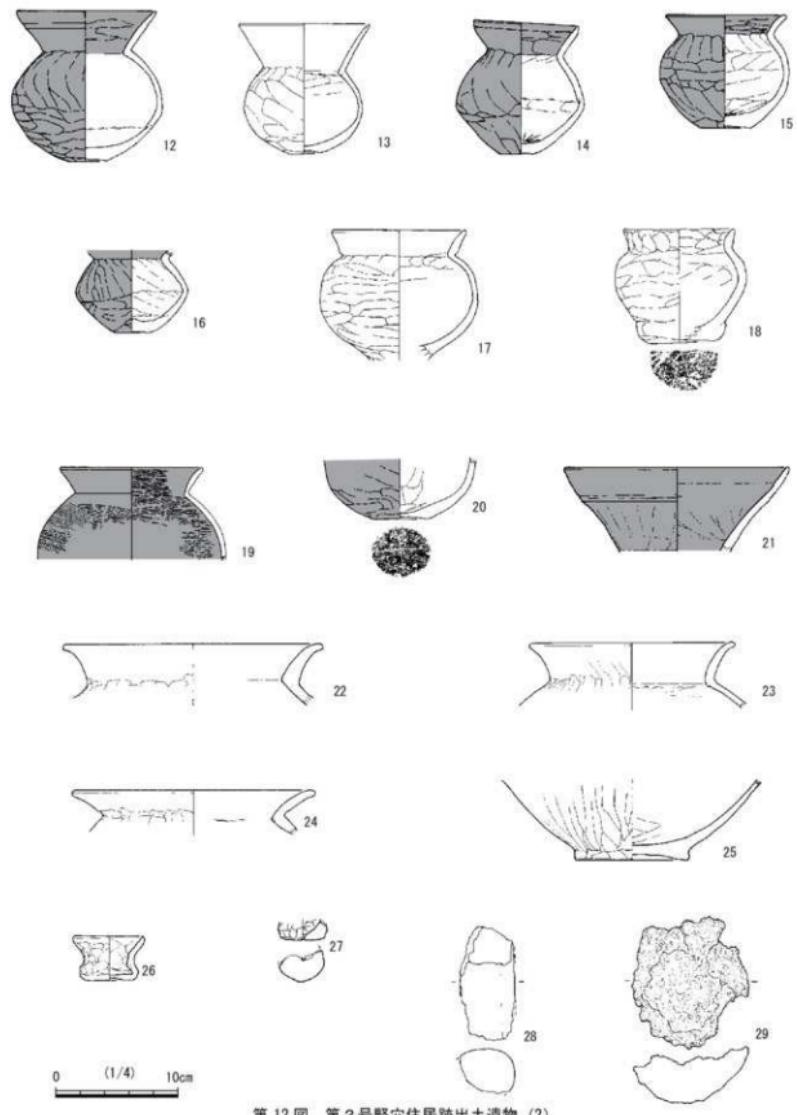
が径 22 cm、深さ 49 cm、P2 が径 23 cm、深さ 52 cm、P3 が径 22 cm、深さ 110 cm、P4 が径 25 cm、深さ 44 cm である。類似した覆土や配置状況からこれらが主柱穴だと判断した。【貯蔵穴】北隅に 1 基とその対角線上の南隅に 1 基の合計 2 基が付設される。いずれも平面形状は丸み持った方形を呈し、断面形は U 字状又は箱状に掘り込まれる。北隅にある貯蔵穴 1 の規模は長軸 75 cm、短軸 72 cm、深さ 56 cm で、長方形に掘り残された高まり上に構築されている。南隅にある貯蔵穴 2 の規模は長軸 90 cm、短軸 87 cm、深さ 61 cm を測る。【炉】P1・4 間中央に 1 基と、その炉跡から南側に約 2.5m 離れた位置に 1 基の 2 基を検出した。P1・4 間の炉 1 は長楕円形で浅く窪む。規模は長軸 98 cm で短軸 55 cm、深さ 7 cm を測り、火床部は径 42 cm と径 31 cm の 2ヶ所に分かれている。南側の炉 2 は歪んだ円形で皿状を呈し、規模は長軸 52 cm、短軸 48 cm、深さ 3 cm を測る。いずれの炉跡も火床部は顯著に赤色化し硬化する。【遺物】焼土や炭化材に混在して出土している遺物が多い。また、貯蔵穴内部からの出土も目立ち、特に炉から貯蔵穴 1 間に集中する傾向が認められた。土師器は 488 点で、本次地点から検出された遺構の中では最も多い出土量である。器種別に見ると高壺と小型壺の出土が目立ち、双方が近接して住居内の壁際や貯蔵穴内に分散して出土している。なお、高壺については壺部と脚部の中で同一個体のものが含まれているとは思われるが、ほとんどが接合しなかった。【時期】遺構の形態や出土遺物から、古墳時代中期前半と考えられる。



第10図 第2号整穴住居跡 (1)



第 11 図 第 2 号竪穴住居跡 (2)・同出土遺物 (1)



第12図 第2号整穴住居跡出土遺物(2)

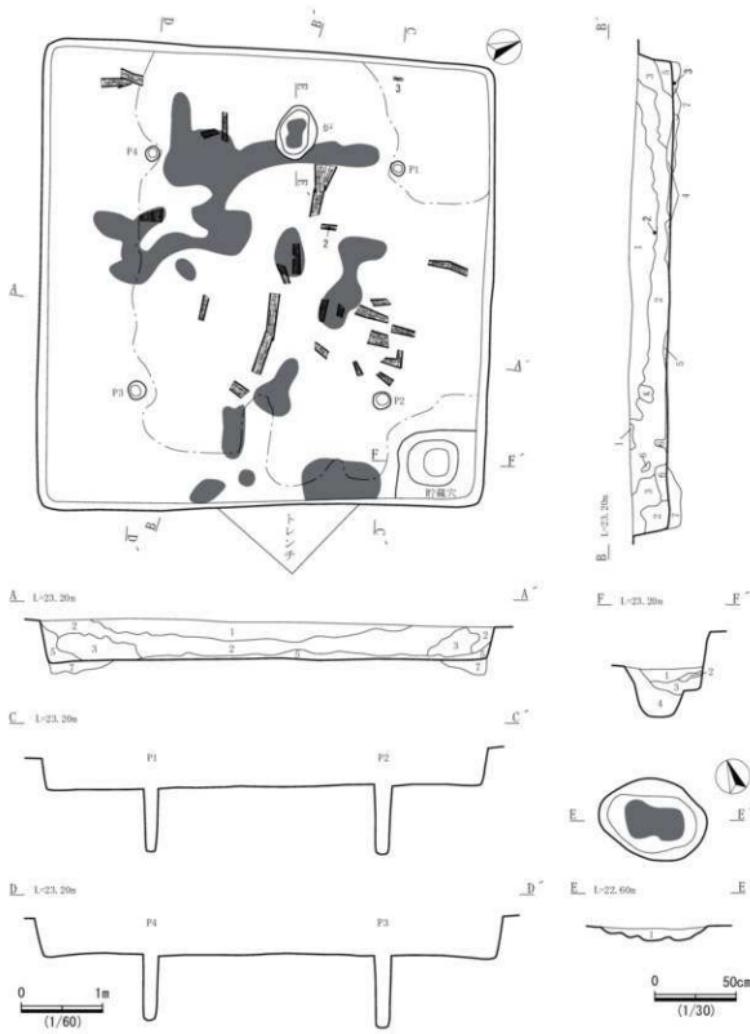
### 第3号竪穴住居跡（第13・14図、図版4）

【検出状況】C3・4グリッドに跨がって位置する。他遺構との重複関係は認められない。【形状・規模】平面形はほぼ正方形であるが、南西壁側がやや広くなり若干の歪みを見せている。炉を通る方向を主軸とした場合、N-65°-Wを示す。規模は主軸方向が5.45～5.80m、主軸に直交する方向が5.52～5.63m、遺構確認面から床面までの深さは0.45～0.52mを測る。【覆土】黒褐色土と暗褐色土を主体とした6層に分層される。埋没状況は自然堆積の様相を呈している。床面直上では焼土が多く含まれ、炭化材が散乱することから、焼失した住居跡と考えられる。焼土や炭化材が炉周辺から北東側を中心に認められ、特に焼土は第2号竪穴住居跡よりも多く、住居内のほぼ全体に広がっていた。【床面・壁】床面は貼り床を施して平坦に整えられ、主柱穴間の内側では顕著な硬化面が認められる。掘り方は壁際を深く掘り込んでいた。壁はやや外傾して立ち上がる。【柱穴】4基を検出した。いずれも平面形は円形で、断面形は円筒状に掘り込まれる。規模はP1が径17cm、深さ78cm、P2が径22cm、深さ87cm、P3が径22cm、深さ87cm、P4が径16cm、深さ81cmである。配置状況からこれらが主柱穴と判断した。【貯蔵穴】遺構の北東隅に付設する。平面形は丸みをもった方形で中段からは円形状に掘り込まれ、断面形は逆台形状で壁際に段を持つ。規模は長軸95cm、短軸85cm、深さ59cmを測る。【炉】P1・P4間中央のやや北西壁寄りにあり、楕円形で浅く皿状に窪む。規模は長軸68cm、短軸50cm、深さ8cmで、火床部は強く被熱する。【遺物】ほとんどは焼土や炭化材に混在して出土しているものの、出土量は土師器が35点と極端に少ない。器種としては壺や高杯が主体ではあるが、細片のため図示可能のものはなかった。一方、炉周辺から出土した1の壺や2の壺は、各1点のみではあるが遺存度が高い。3の刀子は床面の掘り方に近い地点で出土している。【時期】遺構の形態や出土遺物から、古墳時代中期後半と考えられる。

### 第4号竪穴住居跡（第15図、図版4）

【検出状況】A・B3グリッドに跨がって位置する。他遺構との重複関係は認められない。【形状・規模】北東側のほとんどが調査区外となるため全容は把握できていないが、概ね方形を呈すると考えられる。南西壁の方向を主軸とした場合、N-26°-Wを示す。確認された範囲での規模は、南西壁側が5.02m、南東壁側が1.64mで、遺構確認面から床面までの深さは0.43mを測る。【覆土】黒褐色土を主体とした6層に分層され、埋没状況は自然堆積の様相を呈す。覆土は3層以下が特に縮まる。【床面・壁】床面は薄い貼り床で平坦に整えられる。掘り方は壁際を深く掘り込んでいるとみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。【柱穴】P1・2を検出した。P1は円筒状に掘り込まれ、規模は径25cm、深さ104cmを測る。配置状況から主柱穴の内の1基である可能性が高い。平面形がほぼ同規模で深さ18cmのP2が北東側に接している。【炉】今回の調査範囲では検出されなかった。【遺物】竪穴住居跡の一部を検出したに過ぎないため、土師器の出土量は9点とわずかである。器種としては壺の細片が主体で、その内1点を図示した。P1直上からの出土で、底部のみの残存であるが胴部にかけて球状に膨らむ器形とみられる。【時期】出土遺物から、古墳時代中期の可能性が高い。

(斎藤・高野)



第13図 第3号竪穴住居跡

### S103 土層説明

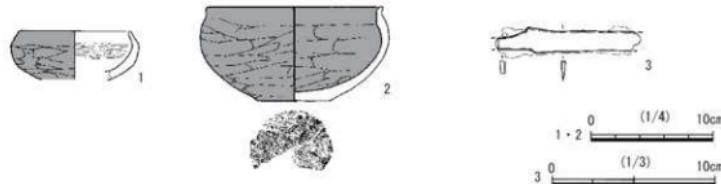
- 1 黒褐色土 7.SYR2/2 全体的にローム粒少量含む。縮まり・粘性弱。  
 2 黒褐色土 7.SYR3/2 支点付近ではロームブロック（小）、焼土ブロック（小）少量含む。縮まり・粘性有。  
 3 線褐色土 7.SYR3/4 ロームブロック少量含む。縮まり・粘性有。  
 4 開白色土 7.SYR4/3 床面上の覆土で炭化物、炭化粒が多量含む。縮まり・粘性有。  
 5 線褐色土 7.SYR3/4 ローム粒多量含む。縮まり・粘性有。  
 6 線褐色土 7.SYR3/4 ローム粒・ロームブロック（小）多量含む塊。縮まり・粘性有。  
 7 線褐色土 7.SYR3/4 ロームブロック（小～中）・ローム粒多量含む。縮まり強。（掘り方）

### 井戸穴 土層説明

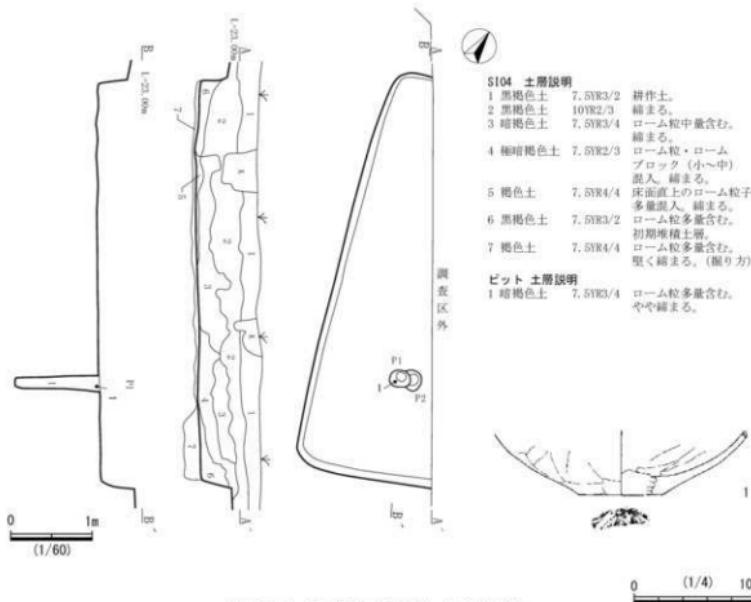
- 1 暗褐色土 7.SYR2/3 ロームブロック（中～大）少量含む。縮まり・粘性弱。  
 2 黒褐色土 7.SYR2/2 ローム粒少量含む。縮まり・粘性有。  
 3 線褐色土 7.SYR2/4 ロームブロック（小）・ローム粒全般的に含む。縮まり・粘性有。  
 4 開白色土 7.SYR3/4 ロームブロック（小～中）・ローム粒多量含む。縮まり・粘性有。

### 炉 土層説明

- 1 暗褐色土 7.SYR3/4 焼土粒多量含む。縮まり・粘性有。



第14図 第3号竪穴住居跡出土遺物



第15図 第4号竪穴住居跡・同出土遺物

## 第4章　まとめ

### (1) 縄文時代

本次調査における縄文時代の遺構は、土坑1基のみの検出に留まった。古山遺跡内で実施された過去の調査を振り返ると、第1次地点では早・前期の遺物を伴う集石や堅穴住居跡が検出されているものの、第2・3次地点では本次地点同様に希薄であることから、該期の遺構は坂月川に面した縁辺部を中心に展開した傾向がうかがわれる。

一方、遺物の時期を出土量から概観すると、本次調査では全量で103点と少ないながらも前期後半の興津式期～栗島台式期と後期後半の加曾利BⅢ式期の2時期に主体のあることが理解された。第1次調査では第1号住居跡で興津Ⅱ式・諸磯c式及び前期終末の土器が主体に出土している例や、阿玉台式期を中心に前期末葉から中期初頭の資料も多く確認されている第2次調査とは類似した成果が得られている。隣接する加曾利貝塚との対比で、阿玉台式後半以降の土器群の出土が少ない点が指摘されており（田中1990）、本次調査でもその傾向にあると考えられるが、第3次調査同様に後期後半の加曾利B式期になって出土量が再び増加する点は注目される。

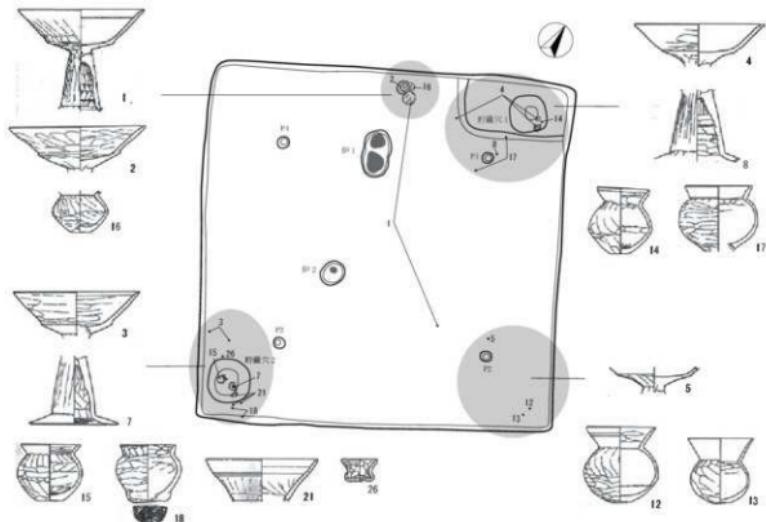
最後に本次調査の縄文土器分布状況に目を向けると、調査区北側からの出土量が約9割を占め、南側では極端に減少する。北側に位置する第3次調査地点での出土量が459点であることを鑑みると、本次地点が縄文時代生活域の南端にあたるのかもしれない。

### (2) 古墳時代

古墳時代の遺構は、堅穴住居跡4軒を検出した。ここでは小沢洋氏の編年觀（小沢2008）をもとに変遷をたどってみたい。最も古相とみられるのは第2号堅穴住居跡である。遺物は高坏と小型品が主体となって出土するが、器台は認められない。高坏は坏部が大形化したものを主体とし、脚部は中膨らみの柱状に近い円錐状のものが目立つが、中実部を残すものも併存している。埴は大型品の破片も出土するものの、小型品が中心である。壺では「くの字口縁」とともに、頸部が湾曲するものも見られる。これらの様相から中期前半、5世紀初頭の2a～2b期に相当すると考えられる。住居形態は規模が7.5m程あり、該期のものとしては最大に近いと考えられる。構造としては主柱穴があり、炉は確認された2基の内、主要に用いられたとみられる炉は主柱穴を結んだ線上に位置している。貯蔵穴は南北各隅の対角線上に2基が検出され、いずれも方形状を呈し、北側貯蔵穴周辺は床面が一段高くなる所謂「隅台部」が設けられていた。次に後続するとみられるのは第3号堅穴住居跡で、第2号堅穴住居跡に比べて遺物の出土量が極端に少ないが、覆土中から平底で口縁が短く外反する坏や、小振りで口縁が内湾する坏が出土している。坏の形態から概ね中期4期、5世紀半ば頃と想定される。住居形態は規模が5m台で該期では平均的である。炉は主柱穴線上より外側に位置し、線上に位置するものより次段階の初期カマドに関連性があると指摘された傾向に合致するものである。貯蔵穴は方形状で隅に設けられている。なお、第4号堅穴住居跡は、ほとんどが調査区外になるため時期は不明瞭であるが、床直上から出土した土師器壺の底部からの立ち上がりが球胴形になることや住居規模が一辺5m台であることから第3号堅穴住居跡に近い時期の可能性がある。そして最も新しい時期の住

居跡は第1号竪穴住居跡である。遺物の出土量はそれなりにあるものの、甕の胴部片が主体で時期を特定する遺物が少ない。形態の確認できる甕を見ると、口径と胴径がほぼ拮抗し、頸部が明瞭でなくなることから、後期の後半段階に位置づけられよう。住居形態は6m前後の規模で主柱穴があり、北西壁にカマドが付設される。これまでに行われた古山遺跡での3次にわたる調査では後期の遺構は報告されておらず、本次の第1号竪穴住居跡が初めての検出例となった。

この時代の中で注目されるのは、第2号竪穴住居跡から出土した遺物の位置である（第16図）。この住居跡は焼失しており、焼土や炭化材に混在して多くの遺物が出土しているが、床直上の遺物に限定してみると、2基ある貯蔵穴付近の隅と東隅、そして炉付近の壁際に配置した意識性がうかがえる。いずれも高杯と小型品がセット関係で出土し、被熱しているため焼失前に置かれたことは間違いない。これらは儀礼的行為に使用された可能性が高く、居住施設を廃棄する際の行動として注意が必要であろう。一方で、後続する第3号竪穴住居跡は、同じ焼失住居跡でありながら、同様の状況はうかがわれず、出土遺物の量にも極端な開きがあるなど、差異が認められることも興味深い。（高野）



第16図 第2号竪穴住居跡・床直上出土遺物

#### 【引用・参考文献】

小沢洋 2008『房総古墳文化の研究』六一書房

小林嵩 2018『千葉市古山遺跡（第3次）』株式会社拓匠開発・公益財團法人千葉市教育振興財團

田中英世・菊池健一 1990『千葉市古山遺跡』宗教法人阿彌陀寺・財團法人千葉市文化財調査協会

古谷涉 2010『千葉市古山遺跡』有限会社開成・財團法人千葉市教育振興財團埋蔵文化財調査センター

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	器高	部位・残存率・製作技法・その他の特徴	胎土	色調(外面:内面)	焼成	出土位置備考
<b>直筒外縁文土器</b>							
1	圓文土器 深鉢	(2.9)	波状口縁部。單錠LR繩文横回転施文。	砂綿、角閃石、白色粒	黒 7.5YR4/4 : 黒 7.5YR1/4	普通	A-B1~29°±1°)* 黒灰式
2	圓文土器 深鉢	(2.8)	胴部片。單錠LR繩文回転施文。	砂綿、砂粒多量、 鉄状物微量	黒 7.5YR6/6 : 灰褐色 10YR4/2	普通	S102 黒灰式
3	圓文土器 深鉢	(5.7)	胴部片。貝殻複縞連續波状文施文。底部付近の繩片と みられる。	石英少量、白色 粒、砂粒多量	黒 5YR6/6 : 灰褐色 10YR4/2	普通	S102 浮島田～津津式
4	圓文土器 深鉢	(5.3)	胴部片。貝殻複縞連續波状文を密に施文。	石英少量、透明 粒、砂粒	明褐色 7.5YR6/6 : にぶい黒 7.5YR5/4	普通	C-B3~49°±1°)* 津津式
5	圓文土器 深鉢	(3.4)	口縁部片。外面の内面にかけて縱方向の貝殻複縞文を 密に施文し、口縁部下端に押引文を横にさせる。	砂粒多量、鉄状物 微量	黒褐色 10YR1/1 : 灰褐色 10YR5/2	普通	S102 津津式
6	圓文土器 深鉢	(2.4)	口縁部片。貝殻複縞文を斜方向に施文し、下端に押引 文を横走させる。	白色粒、砂粒	にぶい黄褐色 10YR5/4 : にぶい黒 7.5YR5/4	良好	A-B1~49°±1°)* 津津式
7	圓文土器 深鉢	(3.8)	胴部片。縞条施文後、横縞片を2段にわたって施し 区画す。底部付近の破片とみられる。	砂粒、鉄状物	赤褐色 5YR4/4 : 明褐色 7.5YR5/6	普通	A-B1~29°±1°)* 津津式
8	圓文土器 深鉢	(4.7)	口縁部片。口縁部底に圓文原体1を2列押正。地文 には同じ原体を用いて無筋LR繩文を施し、口唇部にも 用いる。内面は横方向の丁寧なミガキ。	石英少量、白色 粒、鉄状物微量	明褐色 7.5YR5/6 : 明褐色 7.5YR5/6	普通	C-B3~49°±1°)* 要島台式
9	圓文土器 深鉢	(3.3)	胴部片。地文無筋LR繩文施文。接続時軸文が認められ る。	大粒石英、透明粒	灰褐色 10YR4/2 : にぶい黄褐色 10YR5/4	普通	C-B3~49°±1°)* 要島台式
10	圓文土器 深鉢	(4.8)	胴部片。地文に無筋LR繩文を施文。補修孔あり。内面 は横方向の丁寧なミガキ。	白色粒、砂粒	明褐色 7.5YR6/6 : 明褐色 7.5YR6/6	普通	要島台式
11	圓文土器 深鉢	(5.1)	胴部片。接続時軸文と单錠LR繩文横・縦回転で羽状 を構成。内面は丁寧なミガキ。	白色粒、透明粒	明褐色 5YR5/6 : 灰褐色 10YR4/2	良好	C-B3~49°±1°)* 要島台式
12	圓文土器 深鉢	(4.3)	胴部片。太目的單錠LR繩文を横回転施文。下端に接続 回転文が認められる。	長石、砂粒	長石、砂粒	良好	S103
13	圓文土器 深鉢	(3.1)	胴部片。單錠LR繩文を縦回転施文。	雲母、大粒長石	黒 10YR4/6 : 黒 7.5YR4/6	良好	S101
14	圓文土器 深鉢	(4.6)	口縁部片。無文。口縁部底直下に浅い凹縞文を施す。	白色粒少量、斜状 物微量	にぶい赤褐色 5YR4/4 : にぶい黒 7.5YR5/3	普通	S101
15	圓文土器 深鉢	(4.5)	口縁部片。無文。口縁部底直下に幅広の浅い凹縞文を施 す。	大粒石英多量、長 石、透明粒	にぶい黒 7.5YR6/4 : にぶい黒 7.5YR5/4	普通	A-B1~49°±1°)* 阿玉台 I 1~1本式
16	圓文土器 深鉢	(2.8)	口縁部片。多条の有筋沈線を施す。	白色粒、砂粒	明褐色 5YR5/6 : 明褐色 5YR5/6	良好	A-B1~29°±1°)* 阿玉台 I 1本式
17	圓文土器 浅鉢	(4.4)	口縁部片。無文。内面に赤彩の残存あり。	大粒石英多量、長 石、砂粒	にぶい赤褐色 7.5YR5/4 : にぶい赤褐色 5YR5/4	普通	A-B1~29°±1°)* 中期後半
18	圓文土器 深鉢	(5.1)	口縁部付近の破片。陸帯と沈線で区画し、区画内に單 錠LR繩文を横回転施文。	大粒石英、長石多量、 砂粒	にぶい黄褐色 10YR6/4 : にぶい黄褐色 10YR6/4	普通	S101 加曾利B式
19	圓文土器 深鉢	(5.2)	胴部片。地文は單錠LR繩文を縦回転施文。2本の平行 沈線を垂下させ、沈線間に剥離を示す。	長石、砂粒	にぶい黒 7.5YR5/4 : 明褐色 7.5YR5/8	普通	C-B3~49°±1°)* 加曾利B-II~III式
20	圓文土器 深鉢	(4.8)	胴部片。地文は單錠LR繩文を縦回転施文。沈線を垂下 させ沈線間に剥離を示す。	白色粒、透明粒、 砂粒	灰褐色 7.5YR4/2 : にぶい赤褐色 5YR5/4	普通	S101 加曾利II式
21	圓文土器 深鉢	(3.0)	口縁部付近の破片。微隆線による凸縞文。	白色粒多量、砂粒	灰褐色 7.5YR4/2 : にぶい黄褐色 10YR6/4	良好	S102 加曾利IIIV式
22	圓文土器 深鉢	(2.5)	胴部片。地文は單錠LR繩文を縦回転施文。微隆線を垂 下させ、内側剥離を示す。	白色粒少量、砂粒	黒 7.5YR4/5 : 黒 7.5YR4/6	普通	A-B1~29°±1°)* 加曾利IIIV式
23	圓文土器 深鉢	(4.7)	波状口縁部片。波状混及びその直下に押正。地文は單 錠LR繩文を横回転施文。	白色粒、砂粒	明褐色 5YR5/6 : 明褐色 5YR5/6	普通	S101 中期後半
24	圓文土器 深鉢	(3.4)	胴部片。地文LR繩文を横回転施文。沈線を垂下させ せる。	長石、砂粒	黑褐色 10YR2/2 : 明褐色 5YR5/6	普通	A-B1~29°±1°)* 極之内I式
25	圓文土器 深鉢	(7.9)	胴部片。地文単錠LR繩文に曲線的沈線を描き、沈線周 囲を剥離し、内側は丁寧なミガキ。口縁部 周囲を剥離し、内側は丁寧なミガキ。	黒色粒、砂綿	赤褐色 5YR4/6 : 明褐色 5YR5/6	良好	S101 加曾利IIIB式
26	圓文土器 深鉢	(3.9)	波状口縁部片。内外面横方向の丁寧なミガキ。口縁部 外端にキザミを加え、直下に沈線を施す。	黒色粒、透明粒、 鉄状物微量	にぶい黒褐色 7.5YR6/4 : にぶい黒褐色 7.5YR6/4	良好	S102 加曾利IIIB式
27	圓文土器 深鉢	(3.1)	波状口縁部片。無文で外側ナード。	黒色粒、砂粒	にぶい赤褐色 5YR5/4 : 黒 7.5YR4/4	良好	S101 加曾利IIIB式
28	圓文土器 深鉢	(5.8)	波状口縁部片。口縁部直下に刻文帯を巡らせ、地文は 單錠LR繩文を横回転施文。内面横方向ミガキ。	黑色粒、砂粒	にぶい赤褐色 5YR5/4 : 黒 7.5YR4/4	良好	S101 加曾利IIIB式
29	圓文土器 深鉢	(3.6)	胴部片。頭部下端に刻突し。胴部地文單錠LR繩 文横回転施文、斜方向条縞文。内面ヨコナカ。	白色粒少量、斜状 物微量	灰褐色 10YR4/2 : にぶい黄褐色 10YR5/4	良好	S102 加曾利IIIB式
30	圓文土器 深鉢	(5.8)	胴部片。地文は無文で斜方向の条縞文を施す。	透明粒、砂粒多量	灰褐色 10YR4/2 : にぶい黄褐色 10YR5/3	普通	S101 曾谷～安行I式
31	圓文土器 深鉢	(3.2)	胴部片。地文は無文で斜方向の条縞文を施す。	白色粒、透明粒	黒 5YR4/5 : 黒 7.5YR4/4	良好	A-B1~29°±1°)* 曾谷～安行I式
32	圓文土器 深鉢	(3.5)	胴部片。幅広の浅い沈線による削消沈文。單錠LR繩文 を横回転施文。	長石、砂粒多量	黒 5YR6/6 : 明褐色 5YR5/6	良好	S101 安行II式
33	土製品 土質岩盤	長さ：3.3cm 幅：2.9cm 厚さ：1.45cm 重量：14.0g	青剤により剥離帶に斑紋を施す。加曾利I式の破片を再利用。	白色粒少量、砂綿	赤褐色 5YR4/6 : 明褐色 5YR5/6	普通	S102
34	石器 磨石	長さ：7.9cm 幅：5.6cm 厚さ：3.5cm 重量：136.0g	石材：安山岩 被熱あり。	石材	石材：安山岩	S102	

遺構番号	種類 部材	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面・内面)	焼成	出土位置 備考
第1号型穴住民窯							
1	土師器 甕	(19.8) — (18.1)	2/59。口縁部内外面ともにヨコナダ。脚部外縁上斜方向、下端縫方向へラケズリ。内面斜方向へラナダ。	石英、透明粒、白色粒、砂粒	黒 7.5TR4/1 : にぶい赤褐 5TR4/1	普通	床面
第2号型穴住民窯							
1	土師器 高杯	20.4 16.6 (7.5)	9/10存。外面は内外面赤彩。外面縫方向へラナダ後、口縁部へ体部ヨコナダ。肩部へラナダ。内面口縁部ヨコナダ。体部器面荒れ調整不鮮明。脚柱部外面赤彩、外縁方向へラケズリ、内面指頭によるナダ。	石英、長石、白色粒、透明粒、針状物、砂粒	にぶい赤褐 5TR4/1 : 赤褐 5TR4/6	良好	床面
2	土師器 高杯	22.2 (7.1)	部部10存。脚部欠損。外面赤赤彩。外縁方向へラケズリ後へラナダで接縫部にへラケズリ痕残存。内面横方向へラナダへラマ工具痕が目立つ。	石英、白色粒、砂粒	にぶい赤褐 2.5TR4/4 : 赤褐色 2.5TR4/6	良好	床面
3	土師器 高杯	(20.6) (7.2)	坏部2/2存。脚部欠損。内外面赤彩。口縁部内外面ヨコナダ。体部内外横方向へラナダ。	長石、透明粒、砂粒	にぶい赤褐 2.5TR4/1 : 暗赤褐 2.5TR4/4	良好	床面・覆土
4	土師器 高杯	(21.3) (6.9)	坏部1/2存。脚部欠損。内外面赤彩。外縁方向へラナダへ体部にかけてヨコナダ。内面器面荒れ調整不鮮明。	長石、透明粒、白色粒、砂粒	暗赤褐 2.5TR4/1 : にぶい赤褐 2.5TR4/4	良好	貯藏穴1・覆土
5	土師器 高杯	— (4.0)	坏部1/4存。口縁部及び脚部欠損。内外面赤彩。外縁へラナダ。内面器面荒れ調整不鮮明。	長石、透明粒、白色粒、砂粒	赤 10R4/6 : にぶい赤褐 2.5TR4/1	良好	床面
6	土師器 高杯	— (4.0)	坏部下端片。内外面赤彩。外縁へラナダ。内面ナダ。	長石、石英、白色粒	赤褐色 5TR4/8 : 赤褐色 5TR4/6	良好	覆土
7	土師器 高杯	14.7 (11.2)	脚部欠損。外面赤彩。脚柱部外縁方向へラケズリ。脚部下面八ヶ接縫で調整へハケズリ。	白色粒、透明粒、砂粒、砂渺少	にぶい赤褐 2.5TR4/3 : にぶい赤褐 5TR4/4	良好	貯藏穴2
8	土師器 高杯	— (11.8)	脚部3/5存。不延欠損。外面赤彩。脚柱部外縁方向へラケズリ。内面横方向へラケズリ。脚柱部外面ナダ。内面ナダ。	白色粒少量、透明粒、针状物、砂粒	暗赤褐 2.5TR3/4 : 黒 7.5TR4/3	良好	覆土
9	土師器 高杯	— (10.2)	脚部2/3存。坏部欠損。外面赤彩。脚柱部は内実で脚部にかけて外縁器面方向のミガキ。脚部外面横方向へラナダ。	石英、長石、白色粒、透明粒	赤 10R4/6 : にぶい褐 7.5TR5/4	良好	床面
10	土師器 高杯	— (6.5)	脚部2/3存。坏部欠損。脚柱部外縁方向のミガキ。内面指頭によるヨコナダ。脚部外器ナダ。内面器面荒れ調整不鮮明。	赤褐色粒、透明粒、砂粒多量	灰褐 7.5TR4/2 : 黒褐 7.5TR4/1	普通	覆土
11	土師器 高杯	5.3 (6.0)	脚部2/3存。坏部及び脚部欠損。脚柱部外ナダ。内面指頭によるナダ。	透明粒、针状物、砂粒	にぶい褐 7.5TR5/4 : にぶい褐 7.5TR5/3	普通	覆土
12	土師器 小型甕	11.3 3.0 12.3	ほぼ完存。外面へ内面頸部にかけて赤跡。外面口縁部ヨコナダ下端に隙縫。頸部から脚部上半ナダ。胴部下半から底部へラケズリ。内面へラナダ。	白色粒少量、透明粒、针状物、砂粒	にぶい赤褐 2.5TR4/4 : 暗赤褐 2.5TR3/1	良好	床面
13	土師器 小型甕	10.7 2.3 10.6	4/5存。外口縁部へ頸部ヨコナダ。体部へラケズリ。内面へナダで体部下端は器面荒れ調整不鮮明。	白色粒、透明粒、砂粒	にぶい赤褐 5TR4/3 : にぶい赤褐 5TR4/4	良好	床面
14	土師器 小型甕	8.6 2.6 10.8	ほぼ完存。外面へ内面頸部にかけて赤跡。口縁部外面ヨコナダ。内面へナダ。体部外面上平縫方向へラナダ。下平上定形へラケズリ。内面へラナダ。	石英、透明粒、针状物微量	にぶい赤褐 2.5TR4/3 : にぶい赤褐 2.5TR4/4	良好	貯藏穴1
15	土師器 小型甕	9.8 4.0 9.3	ほぼ完存。外面へ内面頸部赤跡。外口縁部ヨコナダ。体部へ平縫方向へラケズリ。中位横方向へラケズリ。下平上定形へラケズリ。内面口縁部横方向へラケズリ。体部外面上平縫方向へナダ。	砂粒、针状物	暗赤褐 2.5TR3/6 : 赤褐 2.5TR4/6	良好	貯藏穴2
16	土師器 小型甕	2.6 (6.8)	2/3存。口縁部へ脚部欠損。外面器部及内面頸部赤跡。外脚部上斜縫方向へラナダ。下半へ底部へラケズリ。内面斜方向へラナダ。	白色粒、砂粒、砂穢	にぶい赤褐 2.5TR4/4 : にぶい赤褐 2.5TR5/4	良好	床面
17	土師器 小型甕	(10.8) (10.7)	1/4存。口縁部内外面ヨコナダ。脚部外横方向へラケズリ。内面頸部下端ナダ。脚部器面荒れ調整不鮮明。	白色粒、透明粒、砂粒	にぶい赤褐 7.5TR5/4 : 黒褐 10TR4/2	普通	床面
18	土師器 小型甕	9.0 — 9.3	1/2存。外口縁部指頭押圧、脚部横方向難なへラケズリ。内面口縁部ヨコナダ。脚部横方向へラナダ。底部表面木葉痕。	白色粒、砂粒少量、针状物微量	灰褐 5TR4/2 : にぶい褐 7.5TR5/3	良好	覆土
19	土師器 小型甕	(11.6) — (7.6)	1/5存。外面赤彩。外面口縁部ヨコナダ。脚部横方向へカケナダ。内面は全体に横方向の窪みミガキ。	白色粒少量、砂粒少量	にぶい赤褐 2.5TR4/1 : 赤褐 2.5TR4/8	良好	床面・覆土
20	土師器 小型甕	— (4.9)	1/5存。外面赤彩。脚部斜方向へラケズリで「×」のへラ書き。内面縫方向へラナダ。	白色粒少量、砂粒多量、针状物微量	にぶい赤褐 2.5TR4/3 : にぶい赤褐 5TR4/4	良好	床面
21	土師器 甕	18.2 (6.9)	口縁部へ頸部片。脚部欠損。外面赤彩。口縁部外面横方向へ下端に接縫。脚部外横方向、下端横方向へラナダ。内面斜方向へラナダ。	石英、長石、砂粒多量、针状物微量	にぶい赤褐 2.5TR4/4 : 赤褐 10TR4/6	良好	貯藏穴2
22	土師器 甕	21.1 (5.0)	口縁部へ頸部片。口縁部内外面ヨコナダ。頸部以外外側へラケズリ、内面へラナダ。	白色粒、透明粒	にぶい黄褐 10TR4/3 : 黒 7.5TR4/6	良好	床面

遺構番号	種類	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面・内面)	焼成	出土位置 備考
第2号堅穴住居跡							
23	土師器 甕	(15.8) — (5.5)	口縁部～胴上部。口縁部は内外面ヨコナデ後外面向 斜方向へラケズリが一部入る。頸部以下外面縦方向へ ラケズリ、内面へナダ。	石英、長石、砂粒	黒褐色 10YR3/1 : にぶい黄褐色 10YR5/3	良好	覆土
24	土師器 甕	(19.0) — (3.7)	口縁部～頸部片。口縁部内外面ヨコナデ。頸部以下外 面縦方向へラケズリ、内面へナダ。	白色粒、角閃石、 針状物	褐 7.5YR4/6 : 赤褐色 2.5YR4/8	普通	床面
25	土師器 甕	9.4 (6.6)	胸部～底部片。底面3/5径。胴部外表面縦方向へラケズ リ。底部底面不定方向へラケズリ。内面へナダ。	白色粒、砂粒少 量、砂礫少量	赤褐色 5YR4/6 : 赤褐色 5YR4/8	良好	覆土
26	土製品 手作土器	(3.8) (5.7) 3.6	1/2存。外面ともに指捺で成形後、ヘラケズリで調 整。	白色粒、透明粒	明褐色 7.5YR5/6 : 褐 7.5YR4/3	普通	床面
27	土製品	3.7 (1.7)	底部片。外面へラケズリ。内面指痕痕、ヘラケズリ。 底部中央に孔様、2cmの焼成面内面からの穿孔あり。	透明粒、白色粒、 針状物	明褐色 5YR5/6 : 灰褐色 6YR4/2	普通	覆土
28	土製品	長さ：(9.4) cm 幅：(4.5) cm 厚さ：(3.7) cm	棒状土製品。全体にヘラケズリで舟形に成形。	白色粒、砂粒少 量	良好	貯藏穴1	
29	陶片	長さ：11.0cm 幅：9.7cm 厚さ：4.6cm 重さ：328.0g					覆土
第3号堅穴住居跡							
1	土師器 甕	(9.1) — (4.0)	1/5存。外面一部に赤褐色残存。口縁部内外面ヨコナデ。 体部外表面横方向へラケズリ、内外面横方向ミガキ。	透明粒、针状物、 砂粒微量	にぶい赤褐色 2.5YR4/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	良好	覆土
2	土師器 甕	(14.2) — 6.1 7.8 木葉底	1/2存。口縁部内外面ヨコナデ。体部外表面 横方向へラケズリ、内面横方向ミガキ。底部底面に 物微量、砂粒	透明粒微量、针状物	にぶい赤褐色 2.5YR4/4 赤褐色 2.5YR4/6	良好	覆土
3	鉢製品 刀子	全長：(8.9) cm 身部長：(6.5) cm 基部長：(1.7) cm 厚さ：身部0.3cm・基部0.3cm	身部1.2～1.6cm・基部0.8cm 切先及び基部端欠損、両刃。				床面
第4号堅穴住居跡							
1	土師器 甕	— (7.6) (5.3)	胸下部～底部片。胸部外表面方向へラケズリ、下端横 方向へラケズリ。内面縦方向へナダ。底部底面に木 葉痕。	白色粒、砂粒、砂 礫少量	にぶい赤褐色 5YR3/3 : 黒褐色 7.5YR3/1	良好	床面

第2表 出土遺物集計表

時代・種類	遺物名	時期	遺構	堅穴住居跡				土坑	表記ほか				合計
				S 101 個体 破片	S 102 個体 破片	S 103 個体 破片	S 104 個体 破片		A・B1～2 個体 破片	A・E3～4 個体 破片	C・D3～4 個体 破片		
縄文	黑塗式			1									2
	淡島式～奥津式				1								1
	奥津式					2							6
	粟島台式												3
	五箇ヶ台式			1									1
	前期後半			1									1
	阿玉台			6	1								7
	阿玉台 Ia～Ib式			1									2
	阿玉台 Ib式												1
	加賀利E式		深鉢	1									1
	加賀利E II式				3								5
	加賀利E III式					1							1
土器	加賀利E IV式					14							18
	中期												1
	瓶之内 I 式					7	2	1					12
	加賀利B III式						1						1
	貴賀式						1						1
	豊谷～安行 I 式												2
	後斯～続井式						1						1
	加賀利E V式		直筒		25	1							30
	中期～後期												2
	土製品	加賀利 E I 式	円盤			1							1
	石器		磨石			1							1
小計				0	62	0	11	0	4	0	0	0	103
古墳	高坪 (环部)	30	2	53	3								52
	高坪 (脚部)	1	1	12									15
	小型埴・堆	2	6	19	1								32
	环	6			1								8
	甕	57	157	14	3								249
	片	135	238	15	6								433
	土器		1	1									3
	土器												1
	土器												1
	鐵製品						1						1
	鉄鋤												1
	輪型洋漆等						1						1
小計				0	231	10	482	2	34	0	9	0	840
近世	縄器		染付瓶		1								1
	陶器		直筒・楕										2
小計				0	1	0	0	0	0	0	2	0	3
総合				0	294	10	493	2	38	0	9	0	946

# 写 真 図 版



調査区 全景（北から）



調査前現況（南から）



調査区 全景（南から）



調査区北西側 全景（南から）

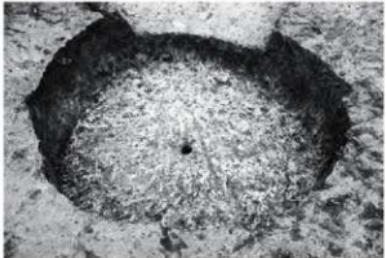


調査区北東側 全景（南から）

写真図版 2



基本層序（北から）



第1号土坑 全景（北から）



第1号竪穴住居跡 全景（南東から）



同 土層断面（東から）



同 カマド近景（南東から）



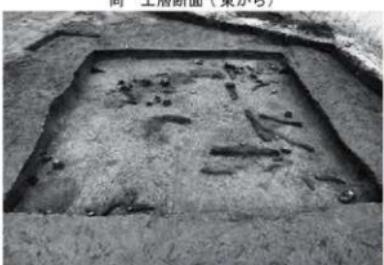
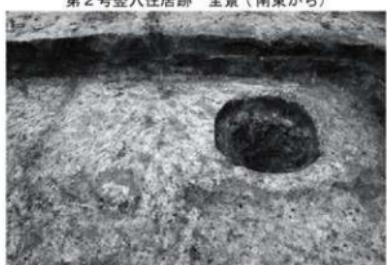
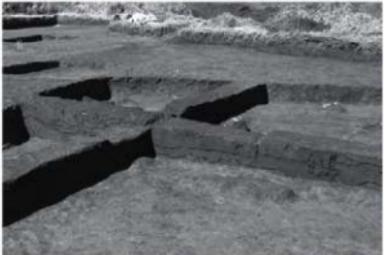
同 カマド土層断面（南東から）



同 カマド右袖脇出土遺物（東から）



同 貯蔵穴近景（南東から）



写真図版 4



第2号竪穴住居跡 貯蔵穴1出土遺物（南東から）



同 貯蔵穴2出土遺物（南西から）



第3号竪穴住居跡 全景（南東から）



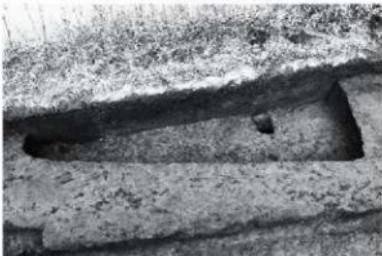
同 炭化物検出状況（南西から）



同 出土遺物（南東から）



同 貯蔵穴近景（南東から）

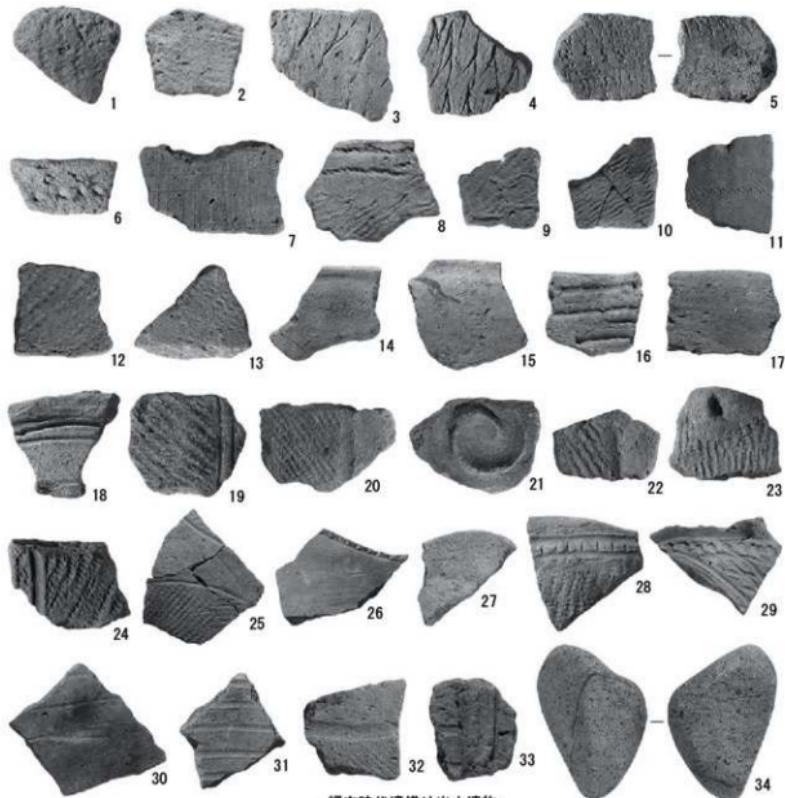


第4号竪穴住居跡 全景（南西から）



同 遺物出土状況（南東から）

写真図版 5



縄文時代遺構外出土遺物



第1号竪穴住居跡出土遺物



第2号竪穴住居跡出土遺物

写真図版 6



第2号竪穴住居跡出土遺物

第3号竪穴住居跡出土遺物

第4号竪穴住居跡出土遺物

抄  
録

ふりがな	しばし ふるやまいせき					
書名	千葉市 古山遺跡（第4次）					
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書					
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	白根義久（千葉市埋蔵文化財調査センター） 高野浩之・斎藤 洋（株式会社地域文化財研究所）					
発行機関	千葉市教育委員会					
所在地	〒260-8730 千葉市中央区間屋町1-35 Tel. 043-245-5962					
発行年月日	2019（平成31）年4月15日					
ふりがな	ふりがな	コ一ド	経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
古山遺跡	千葉県千葉市若葉区 加曾利町1784-2外	12104	若葉区135	北緯 35°37'13" 東経 140°10'04"	20180903 ~ 20181023	575m <sup>2</sup> 集合住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
古山遺跡	集落	縄文時代	土坑1基	土器・土製品・石器		
	集落	古墳時代 中~後期	竪穴住居跡4軒	土師器・手捏 土器・土製品・ 鉄製品・陶型鋤		
	包蔵地	近世		陶磁器		
要約	<p>1 縄文時代      該期の土器は全て遺構に伴わず、遺物の出土量も少量であったが、前期黒浜期を最古に晩期安行3d式期までの土器片が出土した。主体は前期後半～終末期の興津式、栗島台式と後期後半の加曾利BIII式にある。</p> <p>2 古墳時代      竪穴住居跡は中期3軒と後期1軒を検出した。中期の内2軒は焼失住居跡で、遺構形態や出土遺物の状況から時期差がうかがえる。後期の竪穴住居跡は、中期を主体とする本遺跡の過去3次にわたる調査を含めて、初めての検出例となった。</p> <p>3 近世      遺構は検出されず、調査区内に混入したとみられる陶磁器片が出土するのみであった。</p>					

千葉市古山遺跡（第4次）  
—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2019（平成31）年4月15日発行

編 集 株式会社地域文化財研究所  
〒270-1327  
千葉県印西市大森2596-9  
TEL：0476-42-7820

発 行 千葉市教育委員会  
〒260-8730  
千葉市中央区問屋町1-35  
TEL：043-245-5962

印 刷 株式会社ライフ  
〒286-0134  
成田市東和田595  
TEL：0476-24-1564